

Why?

なぜ、矢崎はサステナビリティに取り組むのか？

矢崎の「企業人格」の原点にあるのは、「世の中に必要な企業となろう。世界は仲間だ、助け合うべきなんだ」という創業者の強い想いです。この想いを、ともに働く仲間たちが脈々と受け継ぎ、お客様や地域の皆様に認められ、応援していただくなかで、矢崎の企業人格が形成されてきました。それを明文化したものが、社是「世界とともにある企業」「社会から必要とされる企業」であるとも言えます。

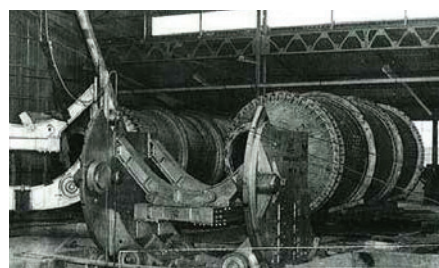
この企業人格は、地域とともに持続的な発展をめざしたいという矢崎の姿勢にも現れています。現地の人々とともに歩み続け、その地域を元気に、そして笑顔にしていきたいとの想いがあります。

矢崎はサステナビリティという概念が広く普及する以前から、自らの存在と活動が持続可能であるべきと考えているのです。

Episode 1

資源を活かす 「トーマス炉」の導入(1957年)

創業者の矢崎貞美は、工場に行くと焼却場に直行し、捨てられている電線の切れ端や被覆を手に取り、「こんなもったいない使い方をしてはならない」と幹部を諭しました。この言葉を実行するべく、貞美は1957年に日本初の回転式溶解炉「トーマス炉」を導入しました。故銅を原料とすることができるトーマス炉は、使用済み電線などを再資源化することができる画期的なものでした。その後も地球環境、特にリサイクルや再生可能エネルギーを活用した事業展開に注力してきました。



沼津工場に導入したトーマス炉

Episode 3

世界とともに (海外進出の幕開け)(1962年)

1962年、初の海外拠点「泰矢崎電線株式会社」を設立しました。当時はまだ、日本企業が生産拠点を海外に設けるのが珍しかった時代。矢崎グループが初の海外拠点としてタイを選んだのは、同国の経済・工業に貢献し、日タイ親善の架け橋になりたいとの想いからでした。60余名からスタートした泰矢崎電線(株)は、今やタイ国内に6法人、従業員数1万人を超えるグループへと成長を遂げ、地域の発展に貢献しています。



タイ進出が矢崎の海外展開第一号

Episode 2

社会の役に立つ製品を(タコグラフの国産化)(1960年)

1950年代後半、モータリゼーションの進展により交通事故が増加し、神風トラックや神風タクシーが社会問題となっていました。矢崎グループは、ドライバーの運行を管理して事故を防止したいという運送業界の要望と、事業用自動車の安全を確保したいという行政の要請に応えるため、1960年にタコグラフ(運行記録計)の国産化を実現しました。これにより、安全な運転管理、労務管理、燃費削減が可能となり、持続可能な運輸業の実現に貢献しました。1962年にはタコグラフの法制化が進み、貸切バスやトラックへの取り付けが義務化され、今でも社会に欠かせない製品となっています。



1960年製タコグラフ『TCO-8』

社是

「世界とともにある企業」
「社会から必要とされる企業」

Episode 5

新しい形での社会課題解決(2000年～)

自動車業界のグローバル化が進むなか、矢崎グループにおいてもワイヤーハーネスの生産拠点の海外移転を進めた結果、日本国内における事業規模を縮小せざるを得なくなりました。そこで地域の雇用を守るとともに、少子高齢化や過疎化などそれぞれの地域が抱える課題の解決に向け、「介護」「農業」「環境・リサイクル」の各分野において、地域社会や環境保全に貢献できる新たな事業に積極的に取り組み始めました。



介護事業 ヤザキケアセンター『紙ふうせん』

Episode 4

地域に寄り添った事業展開を(メキシコ進出)(1983年)

矢崎グループの海外拠点は、首都から200km、300kmも奥に入ったへき地に開設されることも少なくありません。その背景には、雇用を本当に必要とする地域へ進出し、矢崎グループとして何ができるかを誠心誠意考え実行すべきだという考えがあります。1983年にはアメリカとの国境に近いメキシコのシウダー・ファレスにワイヤーハーネス工場を設立。その後の10年でメキシコ全土に19の工場を展開しました。シウダー・ファレスよりさらに奥地に工場を拡大した際には、従業員が地域の住民宅にホームステイし、地域の声を聴きながら一緒に工場をつくり上げるなど、地域の人々に寄り添い地域とともに発展することをめざしてきました。



メキシコ進出第一号のシウダー・ファレス工場